



学校だより

かけ橋

パート III

横須賀市立汐入小学校 校長室

2013. 7. 11

No. 7

元気でやりぬく子  
すすんで学ぶ子  
思いやりのある子

## 雨の日の楽しみ

梅雨が明け、毎日真夏を思わせるような日々が続いています。ちょっと、話題が何週間か前のことで申し訳ありません。

晴れた日は、校庭に出て、のびのびと過ごしている子ども達ですが、雨が降った日は、どうしているのでしょうか。本校では、以前から、体育館を開放したり、図書室を開放したりして、運動や読書に親しむ機会を設けています。



さらに、今年度から、雨の日の音楽室開放も始めました。単純に「開放」と言っても、そこには付き添いの先生がいなければならず、先生方にとっての負担は、増えます。しかし、汐入の子どもたちが望むのであればという気持ちで付き添ってくれています。

音楽室の開放は、授業ではなかなか触れる機会を持ってない打楽器に人気集中しています。大太鼓や小太鼓だけでなく、ティンパニや和太鼓もあります。子どもたちは、大喜びで叩いています。特に、低学年には人気です。高学年は、グランドピアノを弾いている子どももいます。時には、グランドピアノの周りに集まって、みんなで合唱することもあるようです。

「こんな経験から、音楽に興味を持ち、将来、世界的な打楽器奏者が出るかも・・・。」そんな夢のようなことを考えています。

## 玄関クイズ

汐入小の玄関には、クイズがあります。気がついた方はいらっしゃいますか？

現在は、「おいしいはなし クイズⅡ」です。「おいしいはなし」というのは、栄養士の先生が毎日発行しているもので、給食に関わるちょっとしたお話が書かれています。毎日、情報委員が校内放送で読み上げ、クラスでも給食当番が読み上げています。

そこに書かれている内容をクイズ風にしたものです。

- ①魚の「さけ」は、英語で何と言うでしょう？ 「すいか」は？
- ②ぶどう豆のお豆は、( ) です。
- ③給食のマーマレードは、( ) と ( ) を使って作りました。
- ④給食のシーフードカレーのごはんには、( ) が入っていました。

4問とも全部言えるようになった子は、校長室に言いに来ます。今までに、10人の子どもたちが言いに来ました。

ちょっとしたことでも、何だろうと知的な好奇心を持って、それを解決する子になって欲しいと願っています。問題を見て、すぐには分からなくても、友達やお家の人に聞いて、しっかりとと言えるようになって、校長室に来ている子もいます。とても頼もしく思います。

実は、6月28日の授業参観懇談会の日にも、玄関に掲示してありました。ひよっとしたら、保護者の方で、校長室に言いに来てくれる人がいるのでは・・・と密かに期待していました。

# 津波てんでんこ

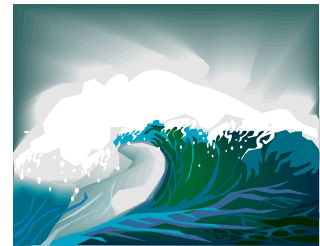
以前から、この言葉は聞いていましたが、先日、市教委の管理職研修で聞き、この言葉の重みを再度認識し直しました。みなさんにもぜひお伝えしたいと思い、ここに載せさせていただきます。

研修のテーマと講師は、

「命を守る主体的姿勢を育む防災教育」 群馬大学理工学研究員教授 片田 敏孝氏

この方は、3. 11が起る以前から、三陸海岸一带に大地震が起ることが想定されていたので、防災に力を入れていました。しかし、講演会を開いても、聞きに来る人は限られていて、防災意識がなかなか広がらないと感じたそうです。そこで、三陸海岸一带から、釜石市に絞り、さらに、一般の大人ではなく、防災教育ということで、子どもたちに対して、防災のことを伝えました。

その結果が、3. 11後、注目された「釜石の奇跡」です。では、釜石の防災教育は、どのように行われたのでしょうか。



①正しく恐れる。

子どもに、津波の恐ろしさだけを伝えると、釜石に住むことが怖くなり、自分のふるさとをきれいになってしまう。そうではなく、海に遊び、自然の素晴らしさを感じながらも、その怖さも合わせて伝え、その日、その時にバチッと逃げられるのが、この土地に住む人間の作法だと教える。

「おどしの防災教育」では、子どもたちが、自分のふるさとをきれいになってしまう。

②その日、その時のことを具体的に想起させる。

ある小学校3年生の男の子の例を話してくれました。

お母さんが大好きで甘えん坊のその子に、「津波が来たら逃げるんだよ。」と教えると、「はい」と言う。でも、それでは、実際の時に、逃げることにはならない。

「外に出ると、地面が割れたり、建物が倒れたり、すごいことになっている。それでも逃げられる?」「・・・。きっとお母さんが迎えに来てくれるから、家で待っている。津波警報が出ても、大人の人には逃げないし、大きな堤防があるから、大丈夫だと言ってるもん」

「そうだね。お母さんは、きっと迎えに来てくれると思うよ。でも、その時、津波が来たら、お母さんも君も一緒に命を失うことになるんだよ。」こう話すと、その子は、真剣な表情になり、目にいっぱい涙を浮かべながら、「ぼく、逃げる。」ときっぱり言いました。そこまで、子どもを追い込む必要があるのか、片田先生も迷ったそうです。

③先人の思い

過去の記録では、子どもが親を待ち、親が子どもを迎えに行くと、その間に津波が襲来し、共に犠牲になった。しかし、親子が互いに避難していることを信じ合えていれば、各人の避難に専念できる。「津波てんでんこ」という言葉の本質は、自らの命に各人が責任を持つこと、家族の信頼関係を築くことである。それを、石碑の前で語る。

お話の中で、ドキッとさせられる言葉がいくつかありました。

『わかりましたか』『はい』という教育では、実際の場面で行動する子にならない。」

「学校でいくら理想を教えても、地域の大人が、そんなことないよと否定しては、子どもにひびかない。」

「親の思いや経験を語るだけでは、子どもにとってリアリティがないので、伝わらない。世代をまたいで、教訓が引き継げない。だから、それをふまえた防災教育のあり方を考える必要がある。」

防災のお話ではありましたが、教育の重要性を改めて感じる研修となりました。